

・解答

	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	備品減価償却累計額	225,000	備品	300,000
	現金	100,000	固定資産売却益	25,000
2	現金	25,000	前受金	25,000
3	仕入	154,000	買掛金	50,000
			支払手形	100,000
			現金	4,000
4	有価証券	1,830,000	未払金	1,830,000
5	当座預金	100,000	仮受金	100,000

・解説

1. 固定資産の売却に関する問題です。

固定資産は期首に売却する場合と、期中（または期末）に売却する場合とで処理が異なるので、まず問題がどちらに該当するのか確認しましょう。

■期首に固定資産を売却する場合

当期の減価償却費はゼロなので、取得原価から期首備品減価償却累計額を差し引いて売却時の帳簿価額を計算し、さらに売却価額との差額で売却損益を計算します。

$$\text{売却時の帳簿価額} = \text{取得原価} - \text{期首備品減価償却累計額}$$

■期中（または期末）に固定資産を売却する場合

当期の減価償却の処理に関する指示が入るので、それによって当期の減価償却費を（月割で）計算します。そのうえで、取得原価から期首備品減価償却累計額&当期の減価償却費を差し引いて売却時の帳簿価額を計算し、さらに売却価額との差額で売却損益を計算します。

$$\text{売却時の帳簿価額} = \text{取得原価} - \text{期首備品減価償却累計額} - \text{当期の減価償却費}$$

■本問はどっち？

本問は売却日に関する情報がなく、また当期の減価償却に関する指示もないため、期首に売却したと仮定して仕訳を考えます。

まず、問題文の「減価償却累計額 225,000 円」から期首備品減価償却累計額の金額が分かるので、取得原価からこれを差し引いて売却時の帳簿価額を計算します。

$$\text{取得原価 } 300,000 \text{ 円} - \text{期首備品減価償却累計額 } 225,000 \text{ 円} = \text{売却時の帳簿価額 } 75,000 \text{ 円}$$

次に、売却時の帳簿価額と売却価額との差額で売却損益を計算します。

- ・売却時の帳簿価額=75,000円
- ・売却価額=100,000円
- ・差額=25,000円（帳簿価額<売却価額…売却益）

★解答仕訳

(借) 備品減価償却累計額 225,000 / (貸) 備品 300,000
 (借) 現金 100,000 (貸) 固定資産売却益 25,000

固定資産の売却に関する問題は、第102回の間2や第105回の間2、第115回の間4、第119回の間5、第120回の間3、第122回の間5、第132回の間2、第134回の間1、第135回の間3、第136回の間2、第137回の間3、第138回の間2、第142回の間1、第146回の間2、第149回の間5でも出題されているので、あわせてご確認ください。

2. 前受金に関する問題です。

前受金は、商品売買に先立ってお金を受け取った場合に使用する勘定科目です。本問は、問題文に「**内金として現金 ¥ 25,000 を受け取った**」とあるので、受け取った25,000円を前受金勘定で処理します。

ここで、問題文の「**商品 ¥ 150,000 の注文を受け**」から、売上が計上してしまった方がいるかもしれませんが、商品の売上は【①第三者に対して財貨または役務の提供が完了】し、【②その対価として現金または現金同等物を受け取ったとき】に計上します。

本問は、②の条件は満たしていますが、まだ①の条件を満たしていないので、**売上が計上することは出来ません**。間違えてしまった方は、もう一度テキストに戻って復習してください。

■仮受金と前受金の違いについて

- ・仮受金…**内容が不明**のお金を受け取った場合に仮に計上する勘定
- ・前受金…**商品売買に先立**ってお金を受け取った場合に計上する勘定

仮受金と前受金についてはきちんと区別できるようにしておいてください。なお、商品売買に先立って受け取るお金には「内金」と「手付金」の2種類がありますが、受験簿記では両者を区別して押さえる必要はありません。どちらも受け取ったら前受金勘定で処理します。

■支払った側の仕訳について

本問は、お金を受け取った側の仕訳が問われていますが、内金を支払った側の仕訳も一緒に押さえておきましょう。商品売買に先立ってお金を支払った場合、支払った分を前払金勘定で処理します。

☆参考・内金を支払った側の仕訳

(借) 前払金 25,000 / (貸) 現金 25,000

本問のように、前受金の処理をズバリ聞いてくるような問題は第124回の間3でも出題されています。

3. 仕入取引に関する問題です。
この問題は【掛け仕入に関する仕訳】【約束手形に関する仕訳】【仕入諸掛に関する仕訳】に分けて考えましょう。

【掛け仕入に関する仕訳】

通常の掛け仕入なので、50,000 円の買掛金を計上するだけです。

★解答①

(借) 仕入 50,000 / (貸) 買掛金 50,000

【約束手形に関する仕訳】

問題文に「残額は仕入先を名宛人とする約束手形を振り出して支払った」とあるので、残額の 100,000 円 (=150,000 円 - 50,000 円) を支払手形勘定で処理します。

★解答②

(借) 仕入 100,000 / (貸) 支払手形 100,000

【仕入諸掛に関する仕訳】

仕入諸掛などの付随費用は、商品を仕入れるさいに不可避免的に発生する費用なので、仕訳を切るさいは仕入勘定に含めて処理します。

★解答③

(借) 仕入 4,000 / (貸) 現金 4,000

以上、①②③をまとめると解答仕訳になります。

4. 有価証券の購入に関する問題です。
まず有価証券の購入に関しては、取得原価に付随費用（取得に伴い発生した費用）を含めて資産計上します。

$$\text{取得原価} = \text{購入代価} + \text{付随費用} = @600 \text{ 円} \times 3,000 \text{ 株} + 30,000 \text{ 円} = 1,830,000 \text{ 円}$$

なお、本問のように商品売買取引以外で発生した債務については、未払金を使って処理します。買掛金を使わないように注意してください。

- ・商品売買取引に伴い発生した債権・債務 → 売掛金・買掛金
- ・商品売買取引以外で発生した債権・債務 → 未収入金・未払金

有価証券の購入に関する問題は、第 103 回の問 5 や 第 119 回の問 2、第 121 回の問 5、第 124 回の問 5、第 133 回の問 1、第 138 回の問 1、第 143 回の問 1、第 148 回の問 3 でも出題されているので、あわせてご確認ください。

5. 仮受金に関する問題です。
仮受金は、入金の実事があるものの相手勘定や入金された理由などが不明な場合に、一時的に計上する勘定科目です。本問は問題文の「その内容は不明である」という一文から、仮受金勘定を使って処理すると判断します。

■ 仮受金と前受金の違いについて

- ・ 仮受金…**内容が不明**のお金を受け取った場合に仮に計上する勘定
- ・ 前受金…**商品売買に先立って**お金を受け取った場合に計上する勘定

仮受金と前受金についてはきちんと区別できるようにしておいてください。

■ 内容が判明したさいの仕訳について

その後、相手勘定や入金理由が判明したら、仮受金勘定を適当な科目に振り替えます。

☆参考・例えば、入金の内容が掛けの返済であった場合の仕訳

(借) 仮受金 100,000 / (貸) 売掛金 100,000

仮受金に関する問題は、第 121 回の間 1や第 130 回の間 1でも出題されているので、あわせてご確認ください。
本問は第 130 回の間 1とほとんど同じ問題です。